



(史女代知美代永)

# 素人書畫會を観る

永代美知代

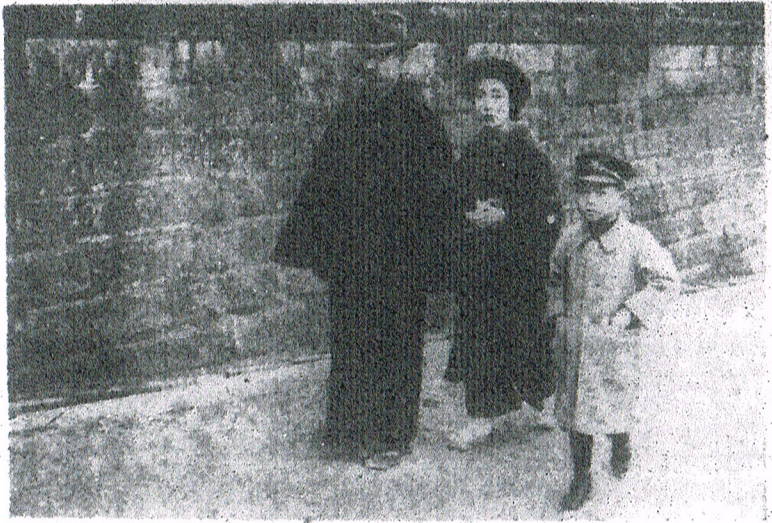
三月十六日は寒て楽しみ待  
つた

素人書畫展覽會の初日でした。折柄生憎の空つ風が烈しく、恐ろしく寒い日でありました。ですけれども流石は春の和らから日光にかげろふ燃えて、展覧會日和とも云度けなうらゝかさに、病後の身もついそゝられて出掛ける氣にもなりました。櫻こそまだ早けれ、梅に桃に紅梅に、上野はこれからが盛りです。まして況んや寛都博覽會に、素人書畫展覽會に、物見遊山の出入の多い事く！

「ニコニコ」主催素人書畫展覽會

「まあ甚い、も少しで本當に恥をかく處でしたよ」  
「ハ、ハッハッ、では今日だけ大目に見ときますからよろしう御座んす」

「ホ、ホ、随分ねえ」  
聲が高かつたか、其處いらの方方が皆さんで此方を見てらつしやる、私は極り悪さに兎に角何處かへ逃げ出すつもりで人込へまぎれ込みかゝると、  
「どうぞ彼方ぬらと、例の記者のお聲掛り、成る程、こんな處へ來たら一番に、初めの方から見通るのが順序でしたつけ。重ね重ねの失敗にすつかりてれ切つて居るうち、ふと眼についたのが松崎天民さん、彼方へ行くには如何してもお傍を通らねばならぬ通路傍に懐ろ手をして、茶色のマントに黒眼鏡と云つた豪傑風で突立つてらつしやる、お辭儀を済して、すつと奥の方に入つたきり、頻りに書畫を見て居ると、



(息令と妻夫伯井龜るたれらせ觀來)

奥さん、僕の畫を見下さい」

と記された精養軒の門をくゞつて、石段々を登るうちにも、風流めかした十徳姿の御隠居とすれちがひ、流石は、流石はと、催しの程もうなづかれました。二階の受附で招待券を渡すと、恰度見知り越しの記者がおひかへになつて居て、愛想よく迎へ下さる。そして机の上に備へ付けの名簿を指し、是非共記名するやうにとお迫りなされる。でも私は名代の悪筆、御辭退すると、來觀者には誰にも願ふ事になつてゐるのだから強てとの事に、眞面目屋の私は、ではまあ仕方がない、金釘流にやつてのけやうかと、念の爲め名簿を見ると、ハテ何の事、

お廊下の外まで一杯の來觀者

に對して、其處にはまだ二三人のお名前しか記されてはありませんでした。

小寺健吉、小寺菊子と御夫婦の繪が

並べてかけてありました。なほ菊子夫人のたんざくが幾枚となくありまして、皆それ／＼におたしなみの程も床しく、此様した場合藝なし猿の私は、御器用な皆様が羨ましくつて堪りません。

「おう、よく來て被下つた、これは小野賢一郎君」  
松永ニコニコ大人が例の如才ない調子で、連れだつてらつした方を御紹介下さつた。

小野さんは兼々雜誌のお寫眞で見上げしてわたとは云へ、斯様してお眼にかゝるのは初めてです。春のお高い、力士のやうな立派な恰幅をなすつて、如何にも無邪氣しいお顔付きでいらつしやる。



突然先に立つて、すんく御自分の繪のある處へ御案内なさる。  
「如何です、うまいでせう、最う殆んど皆な賣約済ですよ」

### 十羽ばかりの燕が飛んで

それに櫻の花の吹雪を二片三片あしらつたもの、谷川にすいくと一叢の蕨が咲いて、其下にかにが五つ六つ、何れも素人ばなれのした、伊味のある面白い流儀の繪でした。が、私の一番欲しかつたのは銀臺の枕屏風へ、赤く、青く、華やかな慶美人草を描いたもの、惜しい事には最う已に、これもやつぱり賣約済なのでした。  
外に一つ賣れてないので『蟻のいとなみ』といふのがありました。これも枕屏風で、楡扇の咲いた庭一面に



(壽子松未るけ於に室憩休)

蟻が行列を作つて居るところ、一寸と平面描寫風のものでしたが、小野さんは非常にお得意の作らしく、日當りの好いお廊下の欄干にもたれて、例の松崎さん等を相手に、頰りと氣焔をあげてらつした。

「君、日本の畫家なんて者は實にブリアなもんだよ、蟻を描けばからつてね、彼等はほんのちよいと、ごま粒を落したやうに黒ぼちを描いて置くだけなんだ、幾本脚があつて、觸角が何本あるもんだか、そんな事は些少とも知らないでゐるんだから可哀相ぢやないか、其處へ行くと僕の畫なんぞ威張つたもんだぜ、兎に角どんな小々な蟻だつてちやんと六本の脚と、二本の觸角を備へてるからえらいよ」  
「併し僕は燕が好きだ」  
「燕は好いね、併し小野君、あのかにはいけないよ第一位が變た、彼方の方が色が青いぢやないか」

### 松崎さんがおけなしなさと

小野さんはむきになつて辯解なさる。  
「だつて君、あれは何だよ、僕があれを描いてるとねえ、社の某君なんか傍で見えてゐて、誰にでも描けるやうに思つてね、オイ俺にも一本描かせろなんて云ふんだもの、よしたまへく、見てゐると何の譯もないやうだがこれで中々こつがあるんだからよしたまへつて、幾ら僕がとめても、無理矢理一本引ばるんだもの、堪らなう」  
「成る程それは堪らないね」  
「だから見たまへ、あんな痕が出来ちまつたんだよ」  
「ハ、ハ、ハ、見て居ると全く誰にでも描けさうだからね、ハ、ハ、ハ、これは面白い」



(氏行兼付肝るたれさ觀來)

「え、西洋行以前ですもの」  
「私まだ獨身の居ますよ、誰か一人お世話下さい」  
「まあ矢張りあの頃のやうな事を仰有つてらつしやるのねえ」  
其處へ松永ニコニコ大人が審査役の巖谷小波先生を御

### 生田葵山氏が、黒紋附のお羽織

着用で、つい私の傍の畫を見入つて居られる。  
「オヤ生田さん！」  
「おう、あなたとは何時かのかかるた會以來で、たね、もう、十年にもなりませうか」